

小岩信竹著

『近代日本の米穀市場―国内自由流通期とその前後』

脇野 博

一

近世史研究に足場をおく者として近代史研究に接したとき、いつも感じてきたことは近代史研究が近世史と切り離されて研究されているのではないかということであった。実際の時間の流れのうえでは近代と近世はつながっており、かつ近代が近世を前提として或いは近世の結果として存在することを思うと、近世から切り離された近代史研究には違和感を感じざるを得なかった。こうした思いを頭の片隅にもつなかくで、「近世の米穀市場の遺産をここに見ることができる」(一一二頁)という指摘に惹かれて本書を手にしてみた。

本書は、近代日本における自由取引時代の米穀市場の展開過程の特質を、市場の統一性と地域性に着目しつつ、当時の米穀取引の実態に即して解明した労作である。本書の構成は、次の通りである。

序章 課題の設定と研究史

第1部 自由取引市場への移行

第1章 明治初年における貢米地払いと米穀市場

第2章 明治10年代の米価動向と米穀中継地市場

第3章 明治前期の米穀流通結社―秋田改良社をめぐって―

第2部 自由取引市場の展開

第4章 明治期における米価および他商品価格の地域間変動について

第5章 明治期における地方米穀取引所と地域間米穀移動―北海道市場をめぐって―

第6章 明治期の農村市場における商品担保金融について―秋田県平鹿郡増田町石田家の事例―

第7章 明治期における米穀移出体制―青森県産米の事例―

第8章 明治後期における地方米穀商人の集荷活動―八戸町富岡商店の事例―

第3部 米穀統制開始期の米穀市場

第9章 米穀法制定期における市場の統一性と地域性

第10章 大正期における北海道への白米移出について―青森県産米の事例―

第11章 米穀取引所の統制政策

第12章 大正末・昭和初期における地域間米穀流通

終章

## 二

本書の主題である米穀市場の統一性と地域性とは何であろうか。本書の結論によれば、米穀市場の統一性とは価格面での統一性であり、地域性とは米穀流通における米の移動が地域性を帯びていたことである。そ

して、価格面での統一性は、近世米穀市場の統一性を引き継いだものであり、近世との連続性を著者は指摘する。それに対して、地域性は近世的な枠組みの延長線上にあるものではなく、近代特有の性質を有するものであり、近世との連続性を著者は否定している。本書においては、こうした近代米穀市場における統一性と地域性が、三部構成にまとめられた一二章からなる実証を主軸に据えた論文によって明らかにされるのである。

そこで、統一性と地域性の要点を概略紹介しておこう。まず、第1部において明治初年の地払いや石代金納、秋田県等の米穀流通機構の分析を通じて、近代米穀市場の成立過程が明らかにされる。近世における米穀市場は、各地域の独自性の上に立つ全国市場という市場構造をもち、この近世米穀市場を前提にして近代米穀市場は形成された。すなわち、幕末期に解体しかかっていた大坂中心の全国市場が、明治政府の中央集権政策によって東京・大阪を中心とする全国市場に再編され、他方でこの再編は地域での米穀流通機構が地方市場へと展開する契機になった。つまり、近世・近代移行期における近世米穀市場の再編が、近代における価格の統一性形成と近代的な地域米穀流通発展の母胎になったのである。第2部では、自由取引時代における米価の統計データを地域間変動の観点から分析することを通じて、明治初年から決して低くはない統一性をもつ米価が、その後もさらに統一性を高めていったことが明らかにされる。また、各地の米穀取引所や北海道への移出米などの米穀取引事例から、米価の地域間の運動性が高かったことが指摘され、この運動性の高さこそが米価の統一性を高める原動力であったことが示される。つ

まり、各地の米価は相互に連動することによって最終的には中央市場米価と結びつき、その結果各地の米価と中央市場米価が連動し、それが米価の統一性となって現れるのである。こうして米価が全国的に統一される半面、地域における米穀流通はより地域性と個性を強めたことが、米穀法施行以後の地域的な米穀移動を分析した第3部で明らかにされる。

以上のように、近代米穀市場における米価統一化と米穀流通の地域性強化という二面性が抽出される。この二面性は、従来の研究史における「明治期の米穀市場は地域性が強く、地域性の克服は明治末期から大正期に実現される」(三一五頁)という見解に対するアンチテーゼであり、近代になって米穀市場は地域性を克服して統一されるといふ単線的な歴史像に対して、著者は統一化と地域性の存在という複線的・重層的な近代米穀市場のあり方を明らかにした。

### 三

さて、ここまでは本書の論点の大枠ばかりに触れてきたので、次に本書の興味深かった論点について若干述べておきたい。

第8章では、青森と上野を結ぶ日本鉄道の開通(明治二十四年)が、八戸の米穀商人の米取引にどのような影響をもたらしたのかが明らかにされている。鉄道が開通したにもかかわらず、八戸の米穀商人は青森から米を集荷することはなく、岩手県から集荷していた。このように鉄道の開通は、米穀取引において特定の地域との結びつきを強め、地域間の流通ネットワーク形成をうながした。つまり、東京という中央に直結す

る鉄道の開通は、地方の米穀取引を直接中央に結びつけたのではなく、逆に地方において地域市場の形成をうながす結果になったのである。評者はこれまで、鉄道の開通によって地方と中央が直結し、地域市場は中央市場に取り込まれることによって解体するものと思ってきたが、鉄道の開通によって地域市場が形成され活性化するという本書の指摘は、目から鱗が落ちる思いであった。また、著者はこうした地域間の特定の集荷ルートの重なり合いが全国市場のネットワークを形成したとも指摘している。これは、地域市場が相互に結びついて全国市場を形成しているということであろう。そうであるならば、相互に結合した地域市場は連動するわけであるから、連動して最終的には各地域市場が同じ動きをするのであり、全国市場という集合体としてみたときに統一性を生じるのであろう。著者は、米穀市場の統一性は価格面での統一性なのであるという点を強調されるが、おそらく地域的な米穀市場の連動が米価の統一性を高めていった根拠であると考えておられるように思われる。しかし、地域的な米穀市場が連動していた要因は明示されていないように感じられた。評者としては、米価の地域間の連動性をもたらした要因を知りたいと思った。

最後に、近世との連続性の観点から一言述べておこう。本書によれば、近世後期に各地に成立してきた地域的な米穀市場が、近代以降は鉄道など近代独自の要素によってさらに地域市場として発展し、またそれらの地域市場は相互に結合していた。また、近世の各地の地域市場は地域市場相互の結合なく大坂と直接結びつき、全国市場が形成された。これに対して、近代以降は地域市場が相互に結合することによって全国市場が

形成され、東京・大阪は全国市場という地域市場の集合体の核であった。このように、近代は近世の地域市場をさらに発展させ、それを再編することによって統一性を生み出したのである。ここでは、近世米穀市場の再編という形で近世と近代の連続性を見いだすことができるとともに、近代以降の地域市場の発展は近代独自の発展であったという点での近世と近代の非連続性を見いだすことができる。評者は今まで、近代というのは近世に生成した地域性を解体し、中央集権によって地域の独自性を否定した社会であると思ってきたが、本書によってその思いは覆された。そして近代とは、個別分散的に存在した近世の地域を、さらに発展させて地域の独自性・個性を強めるとともに、その地域の個別分散性を克服して統一的な集合体を生み出した時代なのではないかと思いは始めている。本書は、近代とは何かを考える上で、極めて刺激的な書である。

(A5判、三三一頁、農林統計協会、二〇〇三年六月、四〇〇〇円)

(わきの・ひろし 秋田工業高等学校教授)